

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
Hashtag：#ありがとう西高

西高の歴史を振り返る

どのようにして西高の基盤が出来、そして発展していったのか。第4回では、今から30年前「平成」という新たな時代に移り、制服改定やさいたま市への3市合併、また区制を経て県内屈指の人気校となっていった西高の「平成史」を振り返る。

第4回 制服変更、女子人気校へ。

1989(昭和64)年1月7日、昭和天皇が崩御し、新たに「平成」という時代が幕を開ける。西高でも、その4月から平成元年度が始まった。なお、平成元年度に着任した先生の中で唯一、現在でも西高勤務している先生が、保健体育科の細野通子先生である。この年は、例年より多い425人が西高に入学し、西高56年の歴史の中で唯一の「9クラス」の世代であった。なお「9組」は教室が足りないため、国語教室という特別教室をホームルームとして使用していたという。

1990(平成2)年に新聞部が創部。翌1991(平成3)年には西高が創立30周年を迎え、記念式典が挙行された。さらに翌1992(平成4)年には制服がリニューアル。ブレザーとなったことが、西高の人気に火をつける。

制服変更前は、ほぼ5:5だった男女比率が、変更後は女子の希望者が一気に増える。基本的に男女間の定員調整は行われていないので、入学者数も女子優勢となった。

1994(平成6)年、校名が「埼玉県大宮西高等学校」から「大宮市立大宮西高等学校」に改称される。またこの年、陸上部が男子110mハードルで全国大会出場を果たした。

西高生、そして卒業生に、「高校一番の思い出は何?」と問えば、何と答えるだろうか。大変に盛り上がる「文化祭」「体育祭」「球技大会」などの季節行事、「毎日の生活」「〇〇先生の授業」、など様々な意見がありそうだが、おそらく一番は、修学旅行だろう。記録を振り返ってみよう。

1988(昭和63)年から1993(平成5)年ま



1992(平成4)年、新制服で迎えた入学式

での5年間は北海道へ5泊6日(電車泊)の旅。1994(平成6)年からの3年間は、一部飛行機を利用して九州へ。その後、1997(平成9)年以降は往復とも航空機利用となり、初の沖縄へ。創立50周年記念誌には、沖縄修学旅行の様子が記されており、「『危険』ということで、海に入ることを禁じられ(中略)服のまま海に入って指導される生徒が相次いだ」というエピソードが記されている。

それ以降、修学旅行は沖縄へ。例外は少なく、1998(平成10)年度、2003(平成15)年度の北海道だけだ。

1999(平成11)年度からは、体験学習として「マリン体験」が導入され、旅行日程の1日ないし半日、海で水しぶきを上げながら満面の笑顔でビーチを駆け巡る西高生の姿がみられるようになった。余談だが、マリン体験以外で海に入ることは禁じられており、違反した生徒には「辞書写し」の罰則があった。一見、ふつうの学校と同じだが、「海に入ろうとした生徒を見逃した」ということで、生徒と一緒に辞書写しをさせられた先生もいたようだ。生徒と教員の距離が近い、西高らしいエピソードではないだろうか。



現在の古墳。築造は6世紀末頃と推定されている

あの場所は、今 -稲荷塚古墳(前編)-

今回は、大宮西高のシンボル「稲荷塚(いなりづか)古墳」について取り上げる。内容が多いので2回に分けてお届けする予定だ。

古墳がある高校というのは県内はおろか全国的にみても珍しい。西高が現敷地に移転して以来、古墳とは半世紀以上の付き合いだ。

記者は現役時代、興味にかられ古墳に登ったことがある。登っている最中に学生手帳を落としてしまい、ついに見つけられなかった。担任に迷惑をかけてしまった苦い思い出となっている。在学中、我々の身近にあった古墳だが、詳しいことは知らない人も多いことだろう。歴史を紐解いてみることにする。

「稲荷塚古墳」は現在の三橋4丁目一帯に形成された側ヶ谷戸(そばがいと)古墳群の一つ。『埼玉県史』によると側ヶ谷戸古墳群は、西高付近に残存している5基の墳丘のこと。この古墳群の築造時期は、出土物である埴輪や石室の建造形式から推定し、6世紀から7世紀後半と考えられている。また、5基以外の場所からも埴輪片が出土したことから、おそらく10基以上は築造されていた、と考えられている。西高敷地内にある「稲荷塚古墳」はその中でも最も規模が大きい。直径25メートル、高さ3.5メートルの「円墳」であり、6世紀末に築造されたと推定される。

『埼玉県史』が発行された1982(昭和57)年、まだ「稲荷塚古墳」内部の発掘調査は行われていなかったが、その後、西高生も参加する形で発掘調査が行われた。次号では、その様子について紹介する。(石井)

大宮西高

自由な校風、可能性は自分次第で

戸塚 健一さん（革職人）

両親の意向から、志望校ではない大宮西高に入学した戸塚さん。紆余曲折ありながらも、結果的には充実した学校生活を送ることができた。

高校卒業後、ようやくやりたかった機械工学の道へ進めると思った矢先、またも両親から反対され、あえなく進路を変更する。

店内に座る牛骨は本物だというCrumsy Life代表、戸塚さんから前回に引き続き話をうかがった。

教授と単位と菓子折と

戸塚さんは一浪の末、法政大学経営学部に入學。市ヶ谷キャンパスは当時、浦和市の実家から十分通える距離だったが、反対ばかりの両親から離れようと、大学の寮に入った。

彼女ができると、戸塚さんは中野区にアパートを借りて同棲を始める。ほどなく親元からの仕送りは止まった。戸塚さんは生活費に悩んだ末、大学を辞めて働こうと決めた。

退学届けを出そうとすると、大学の事務員さんから事情を聴かれた。不意を突かれてありのままを話したところ「うちの大学には夜間部があるんだから」と編入を勧められる。

助言に従い、戸塚さんは大学3年生で、夜間部に編入。しかし、バイク店でのアルバイトに精を出し過ぎ、卒業間近に単位不足が発覚する。教授のところへ菓子折を持って、



西高卒業後を語ってくれた戸塚さん。取材中は笑いが途絶えない。

追試の機会を懇願。「それでも合格点が取れなくて」戸塚さんは身を縮めた。

さらに高価な菓子折を持って教授に頭を下げると、これが最後と2回目の追試を許してくれた。教授の心遣いで卒業できたと、戸塚さんは感謝を隠さない。

シングルファーザーの職業選択

戸塚さんには、留年できない理由があった。それは付き合っていた女性が妊娠し、出産が迫っていたためだ。大学卒業後、晴れて結婚。出産も立ち会った。このままバイク店の仕事を続け、いつか自分の店を出すのかな。ぼんやりと将来を描いていた矢先、戸塚さんはほどなく離婚。シングルファーザーとなった。今から20年ほど前のことだった。

乳児を抱えてバイク店の仕事は続けられない。けれど、バイクに下げるような革製バッグなら、自宅で子供の世話をしながら作れるはず、と行動に移す。

経験こそなかったが、幼い頃からミシンの

前に座る母の姿を見ていた戸塚さんは、自分もできるという確信があった。「今なら絶対、そんな理由で（仕事を）始めないです。『若さ』ですかねえ」頭をかきつつ、戸塚さんは大胆な「路線変更」を振り返る。

順調な滑り出しではなかったものの、作品が雑誌や本で紹介されると、徐々に軌道に乗ってきた。今では往年のロックアーティストやスポーツ選手から、様々な依頼が入る。

今だからわかる自由の価値

改めて、戸塚さんにとって大宮西高で過ごした3年間は、どんな時間だったのだろう。

「当時は自由な校風をネガティブに捉えていました」戸塚さんは続けた。「本当は自分次第で、いろいろできたんですよね」。それが分かったのも、わりと最近と戸塚さんは再び頭をかく。「もう一度通いたい。でも校則が許してくれないか」。トレードマークの長い髪と髭に手をやりながら、最後までサービス精神旺盛に笑いを誘った。